

子どもの育ちと母親の育児姿勢（1）

Growth of Child and Child Care by Mothers (1)

橋 本 景 子

Keiko Hashimoto

（要約）

母子相互作用と言われるように、母親の育児姿勢と子どもの育ちは密接に関連している。しかし、ウィニコットの言うgood enough motherであることは難しい時代である。単なるenough motherになってしまうことが最近の傾向である。その違いが難しい。日本がグローバル化していく課程の中で、今子どもの育ちにとって大切なことは何か、先入観を振り払い、改めて白紙に戻って考えなければならない大切な時である。そんな時代の流れの中で「母親」の役割も揺らいでいる。ここでは研究を進める前に、先行文献から現状を考察した。そして今回の考察を元に、調査内容を作成していく。

（キーワード）

good enough mother、本音を語る、子どもの私物化

はじめに

子どもが親や家族に対して起こす凶悪な事件が増加している。昨今の例で言えば兄が妹を、息子が母親ときょうだいを。中学生の孫が祖父を…殺害している。彼ら加害者のことがマスメディアでいろいろと取りざたされるが、筆者は事件を起こさねばならないところまで追い込まれた彼らもまた被害者であると考えている。

人を殺すために生まれてきた子どもはいない。育っていく課程において何かがあったのである。「普通の子」「いい子でしたよ」と人は言う。その周囲の人々も彼らの心の中の寂しさ、虚しさには気づけなかったし、わかってやろうとしなかったということである。

カウンセラーとして問題を抱える子どもに会ったとき、その背後に母親の問題が見え隠れすることが多い。もちろん、父親やその他その子どもの家族関係者の影響もあるが、なんといってもその影響力が強いのは母親である。その根拠はカウンセリングで立ち直っていくとき、まず母親との関係の修正から始まることが多いからである。また、カウンセリングの中で出会った不登校児でもLDでも、統合失調症（出会ったケースは少ないが）でさえ、その母親の子育てに関する姿勢に疑問を持つことが多かった。

よく喋り、子どもの気持ちに寄り添うこともなく、待つことができずだめ押しをする。あるいは正論ばかり言い「そうよね！」と押しつける。そういう母親をたくさん見てきた。そんな母親に子どもは本音で接することができない。そういう子どもに接したときは、「ああ、この子はずっとこんな中で頑張ってきたんだ」とその頑張りを労ってやる。もしも違う家庭で育っていたら、この子はどんな子になっていたんだろう？子どもに親を選ぶことはできない。しかし、親は選んでしまうときがある。長子と次子、末子。「私は平等にしています」と言ってもやはりまったく同じではない。例えば、「末子は一緒にいると楽でいいけれど、長子はねえ…」と無意識のうちに末子という時間を選んでいくことがある。

子どもを育てるのは多くの場合母親であり、その母親がどれだけの器を持っているかで子どもに与える影響は異なったものになる。先ほどの殺人に関わった彼らも、他の家庭で育てていたらもっと違った人生になっていただろう。子どもの育ちには親の育児姿勢が大きく影響している。ここで「姿勢」としたのは、例えば親が経済的に貧しいか富んでいるかなどという現実より、その「姿勢」が大事であると考えたからである。

ひとつの例であるが、現代においてはどこの家庭でもテレビを所有している。そうであれば、現実には高級レストランに行けなくても、あるいは行く気がなくても、テレビなどを通じてそこがどういう所かを知ることはできるわけである。母親がそういうことに無関心なのか興味を示すのか、つまり広い視野をもっているかどうかで子どもの育つ方向性が変わってくる。高級レストランに行くか行かないかということが問題ではない。そういったことをここでは「親の育児姿勢」と捉えている。

いじめが起きてもその周辺にばかり気を取られ、根本には目を向けず、枝葉ばかりを落とそう、なくそうとする。しかしいじめ問題だけを片付けても、クラスが替わったり進学したりしてその子が違う環境、場所に行けば、また新たな問題が生じることが多い。なぜその子の周辺ばかり見てその背景、その根幹を見ようとはしないのか。たいていの場合、親や教師は周囲に問題があると考え、枝葉ばかりに目を向ける。筆者はそういう「姿勢」に問題があると考え。そこでここでは子どもの初期の育ちにとって重要な母親に焦点をあて、母親と子どもの二者間系について考察していく。

なお、今回は現状と文献から考察していき、次回その実態を調査したいと考えている。

1. 現状と問題点

子どもが育っていく上でその人格形成には、遺伝的要因や個体的要因、環境的要因が関与している。遺伝的要因とは文字通り親からの遺伝によるもので、個体的要因とはその子ども自身の特徴、例えば背が低い・高い、太っている・痩せているなどである。そのことによって劣等感を持ったり優越感を持ったりしてこれも人格形成に影響を与えていく。またそのことが遺伝的要因にも働きかける。そして次に子どもに大きな影響を与えていくのが環境的要因である。

環境的要因には社会・文化的環境や学校環境、家庭環境等があり、その基本となるのは家庭環境であるとよく言われるが、筆者はそのベースとなるのは社会・文化的環境であると考え。これはよく「異文化」という言葉で表されるが、国が違えばその文化も大きく変わってくる。昨今の中国のニュースを見てもそれはよくわかることである。国によって、価値観、人々の感覚も大きく違うものである。それらをベースにしながら、そこに学校環境というものや家庭環境というものが関わることで人格を形成していく。しかし、案外そのことは意識されていない。

しかるに私たちは、どこに生まれたかでその育ちもずいぶん違ったものになる。時にはそのよし悪しまでが違ってくる。例えば、アメリカでは自分の考え・意見をもつこと、そしてそれらを相手に伝えられることは大切なことであるが、日本においては「和」と「同」が混同され、自分の考え・意見は述べないことをよし、みんなに合わせられることをよしとすることもある。最近でこそその傾向も少しは減ってきたが、それも過渡期ゆえの混同が見られる。自分の考えを言うことで、それを押し通そうとする人

子どもの育ちと母親の育児姿勢（1）

や自分勝手な苦情を言う人が増加しつつある。今流行の“モンスターペアレンツ”などというのも大きな勘違いの結果であろう。そういう母親が子どもを育てたらどうなるかである。

また長期に及ぶ海外出張・海外赴任も多く、そこで間違った文化を吸収してくることもある。子どもが親を名前で呼ぶこともそのひとつである。もちろんこれは国内にいても情報文化の影響で勘違いをするのか、平等のはき違えなのか実際に起こっていることである。ある専門学校1年生（21名）のクラスで学生に尋ねたことがある。「将来子どもを持ったら自分のことをなんと呼ばせるか？」と。3名以外の学生は「名前で呼ばせる」であった。その理由は「その方が上から目線でなく平等だから」「上から物を言われると頭にくる」「子どもとは平等にいたい」などが代表的な意見であった。その後、祖父母についても「名前で呼ぶ」というのが増加していることに気付き、その理由を尋ねたところやはり「親しみがある」「おじいちゃん、おばあちゃんと呼ばれると年寄りみたいで嫌だから、本人がそう呼ばないでほしいと言っている」という内容が多かった。

これらは「役割の喪失」に繋がる危険性が高いと筆者は考えている。目に見えないほんの些細なことが子育てには大きな影響を知らないうちに与えていく。この恐さを知らされたのもカウンセリングで出会った人たちからである。無意図的教育の恐さを思い知らされた。それは洗脳にも似たものである。子どもは知らず知らずのうちにその親の価値観のもとで育てられていく。

エピソード1：子どもに自分のことを名前で呼ばせた母親

子どもと「友達でいたい。仲良くしたい」と考えた母親が自分のことを名前で呼ばせていた。子どもは一人っ子だったので、なんの疑問も持たずそう呼び続けたそうである。ところがその娘が高校生になったとき、「私にはお母さんがいない！」と叫んだ。「あんたはお母さんじゃない！○○ちゃんだ！」と。この母親は現在大学で心理学を学んでいるが、「子どもには絶対に名前で呼ばせないでください。」と言う。やはり役割は大切だと身をもって実感したそうである。

エピソード2：親に教えられたことをずっと信じて行っていた50代女性

親に教えられ、入浴時に当然誰もががすることだと思ってやっていたことが、50代になって初めて他の人はやっていないのだと気づいた。自分が家庭を持ってもなおその年まで気づくことがなかった。ある日たまたま夫にそのことを話していたら驚かれ、そこで初めていろいろと人に尋ねた結果、自分の親から教わったことが人から見たら「あり得ない」ことだと気づいた。親の影響力の大きさを示す事例である。

アメリカの社会学の教授であるバーバラ・K. ロスマンはその著書『母性をつくりなおす』の中で、「〈契約カップル〉、〈代理母〉、〈遺伝学的両親〉、〈懐胎する母〉、〈保護権〉を持つ両親、〈保護権を持たない〉両親。卵子、精子、胚盤胞、胚、羊膜、〈つくられつつある赤ん坊〉、〈境界線上にある〉赤ん坊。過去10年間、公の席でこれらの言葉を聴くことが多くなった。」と言っている。子どもを産むということひとつをとっても、ここ10年～20年の間に随分変わってきたということである。また、子どもは医学用

語で〈妊娠による生産物〉と呼ばれるそうである。そうなるとその子どもの「生産過程」が問題となってくる。^{#1}

今や子どもたちを基で見ていると、確かに「生産」という言葉がぴったりだと思われることが度々ある。そう「育てている」というよりも「生産している」という言葉で表した方がぴったりなのである。親がこういうルートでこんな風に育てて欲しいと目標意識を持ち、その目標に向かって子どもを「生産」する。あるいは自分にとって都合の良いように自分に子どもの生活を合わせていく。そしてそこから親による、家庭の中だから問題にならないという理由だけで、実際は洗脳教育が始まっていく。その結果次のようなことが現実に起こっている。

エピソード3：大学で英語の単位を落とした娘

母親が学長に手紙を書き、その英語担当の先生を娘の担当から外してもらうよう依頼した。この先生が担当している限り娘は単位が取れないからと。

エピソード4：子どもの就職希望先を訪問する母親

大学を卒業する子どもたちの就職希望先を母親が訪問し（中には父親もいた）、社長室に至るまでひととおり見学させてもらいながらその会社についての質問をしていく。夜は上役を交え会社主催の食事会。その席で母親は我が子の自慢をする。「うちの子を入社させれば会社の得になる」と。もちろん、本人は抜きである。会社側曰く、「入社してもすぐに辞めていく人が多い。その時の理由として、〈親に辞めろと言われた〉という人が多いので、事前に親御さんに納得してもらって入ってもらうのがいいと考えた。」そうである。

これらの例はまるで親が生産物を抱え、大学や企業とその生産過程を巡り交渉しているようである。企業側にも問題はあるが、明らかに親の姿勢が変わってきている。そういった就職のシステムを求める親がこれからも増加の一途を辿ると思われる。そしてまた社会の有り様が変わっていく。親による子どもの私物化である。いったいどこまで子どもにつきあっていくのであろうか。

またエピソード3のように、近頃は大学でも懇切丁寧に学生の面倒を見なければやっていけない時代になってきたという。大学の教員が欠席が目立つ学生に電話をしている姿が普通になりつつある。それも優しく、まるでカウンセラーのように。今や大学も学びの場ではなく、中学や高校の延長線上の教育の場となりつつある。

本来「子育て」というのは母親自身を育てることもつながっていく。つまりよく言われるところの「母子相互作用」である。「子育て」が母親のアイデンティティを形成していく。しかし、現在の子育てにおいては、エピソード3・4からもわかるように、母親自身が育っていく課程が抜け落ちているようである。また両エピソードに関しては父親も同じことをしているが、ここでは母親に焦点をあてているため敢えて取り上げないことにする。

子どもの育ちと母親の育児姿勢（1）

2. 母子相互作用・愛着・母性

(1) ウィニコット (D. W. Winnicott)

ウィニコットは母性的関わりの重要性を説いた精神分析医で小児科医でもある。小児科医であるが故に気づいたこともたくさんあると思われる。彼は母性的関わりが適切にできる母親を「ほどよい母親 (good enough mother)」と呼んだ。「ほどよい」という言葉が象徴するように、子どもの成長と共に上手に子どもから手を引いていける母親を指している。しかしこの「ほどよく」あることが非常に難しい。なぜなら母親になることを学んだ人はいないからである。

筆者は、高校を卒業するまでにこういうことを学ぶ機会を作る必要があると考えている。それも投げ込み授業ではなく、通年を通しての中で学ばせることである。カナダでは「心理学」の授業が高校でもあると聞いた。多くのカナダの人たちと話す中で、20代の独身男女でもかなり心理の専門分野に近い話ができるのは学校の授業カリキュラムが影響しているのだろう。「母親とは…」と頭でわからせるのではなく、心に訴え考えさせることが現代社会では必要である。

またウィニコットはその著書『赤ん坊と母親』の中で、「抱く」ということについて次のように述べている。「人々は赤ちゃんを見ると、自分の腕に赤ちゃんを抱いてみたい、そういう経験をしたと思うのです。」^{註2-1} と。しかし残念なことに、最近の母親と接すると「ちっとも子どもを抱いていないわ。」という言葉が耳にすることがある。外で、あるいはショッピングセンターで観察をしていると、ベビーカーの中で子ども（特に1歳未満の子ども）は親とは別世界を作っているように思うことが多々ある。いや、子どもというよりも親が別世界を作っているようである。別世界を作っているのは夫婦であったり、女同士の友達とであったりする。ただここに祖母が加わると少し様子が変わってくる。「家族」という雰囲気醸し出す。子どもと母親、祖母との間に一体感が生じてくる。

「母乳」については次のように述べている。「私はまずはじめに、母乳を飲ませることを支持する感傷的な態度や宣伝から、私自身を切り離したいと望んでいます。宣伝というものには別の側面があって、それが常に結局は宣伝に対する反応を生じるのです。疑いもなく、今日の世の中には、母乳を飲む経験をもたずによく育てられてきている人たちがたくさんいます。この事実は、幼児が母親と身体的親密さを経験するにはいくつか別の方法があることを意味しています。しかしながら、どのような場合にせよ母乳を飲ませることが行われなかったら、私自身は常に残念に思うでしょう。というのは、こういう経験がないと、お母さんや赤ちゃん、あるいはその両方が何か大切なものをなくしてしまうと私は信じているからです。」と。^{註2-2}

まさしく現代は彼の危惧したとおりになってしまった。つまり、ここでは母乳栄養が優れているか云々ではなく「コミュニケーションとしての母乳」がいかに大切かを語っている。ウィニコットがこれを書いたのが1968年であるからそれから約40年。変わってしまったものは「親の育児姿勢」である。

(2) ハーロウ (H. F. Harlow)

ハーロウ (Harlow) は幼いアカゲザルを使った研究を行った。それによるとアカゲザルの子どもがしがみつくのは、人形が柔らかくて気持ちが良いという条件さえ満たせば、餌を与えてくれない人形でも

そちらの方に優先的にしがみつくといいものである。しかし、人間の子どもがこれと同じことを現実の場で行ったとき、相互作用がないものにしがみつことができるものであろうか。ハーロウは実験としてこれを行ったわけであるが、人間の親子は実験ではなく四六時中傍にいるものである。初めは確かにしがみつくだろうが、しがみついてもその反応がないとき、果たして何度もしがみ続けるのであろうか。

子どもたちは母親に何度も様々なことを試みるが、それが受け入れられなかったとき、受け入れてほしいという気持ちを無意識の中に抑圧し、それらを諦めるようになっていく。こうして母親との間に少しずつ溝ができていき、いつしか他人（カウンセラーなど）の手を借りないとその溝は埋められなくなっていく。

(3) ボウルビィ (J. M. Bowlby)

母子関係の領域では第一人者と言われるボウルビィは、愛着理論に関連して次のように述べている。「自分の好む相手に対する愛着行動は、人間の子どもの場合、おおよそ生後九ヶ月の間に発達してくる。子どもがある人物と社会的な交わりをもてばもつほど、その子はその人に愛着するようになる。このため誰であろうとその子のマザーリング（母性的養育）を主として担当しているものが、その子の主な愛着対象となっていくのである。愛着行動は三歳の終わり頃までは容易にひきおこされる状態にあるが、健全な発達を遂げている場合には、それ以後になると活発化することが徐々に少なくなっていく。」^{註3}

つまり、三歳頃までに母親から放っておかれた子どもは愛着行動が引き起こされにくい。その子どもの性格や将来の生活全体にも広範囲に悪影響をもたらすと考えたのである。これらは非行少年・少女、あるいは心に問題を抱えた子どもたちと面接したとき、どの子どもにも共通するものである。

ボウルビィと言えは1950年代から1970年代にかけて活躍した人であるが、彼の理論は現代においても欠かせないものの、ここでもやはり年月と共に大人の側の変化を筆者は問題と捉えている。

(4) 大日向雅美

日本での母性研究の第一人者と言えは現代では大日向雅美であろう。修士論文の段階から一貫して母性の研究を継続している。

大日向雅美は『母性こころ・からだ・社会』の中で次のように述べている。^{註4}「確かに子どもの発達にとって母親が果たす役割は大きく、その意義は十分にかつ適切に認識する必要があることはいうまでもない。しかしながら、ことあるごとに母性を強調する傾向は、母性を尊重しているかのようにみえて、その実、母性の形成発達に必要な条件を模索し整備しようとする動きには結びついてこない。むしろ母性を女性の特性として自明視することで、母と子の生活実態を直視することから目をそらしてきたのではないだろうか。」筆者も大日向と同じく、まず母と子の生活実態の把握が先決であると考えている。

母子相互作用とは、母親と子どもがお互いに影響し合いながら成長していくこと。例えば、母親がニコッと微笑むことで子どもがそれを見て嬉しそうな顔をする。そのことでまた母親も嬉しように微笑み返す。このときに気むずかしい赤ちゃんがいて、母親が微笑んでもニコリともしないでぐずり続けると

子どもの育ちと母親の育児姿勢（1）

母親は次第に微笑まなくなる。その逆も同じで、赤ちゃんが母親に対して微笑んでも母親が微笑み返さないとやはり子どもも次第に微笑まなくなる。このように赤ちゃんは母親はやりとりをしながら、お互いにその影響を受け、成長していく。

また、妊娠中でも母親が赤ちゃんの胎動を感じたり、超音波でその姿を映像として見たりするとき、母親の気持ちは喜びでいっぱいになる。それもなんらかの影響を胎児に与えているものと思われる。

また、愛着行動はしがみついたり接近、接触、微笑、泣き、呼びかけなどの信号行動が含まれるが、それを受け止めてくれない母親に対して、子どもは不安定な愛着行動を示すようになる。欧米ではこのタイプの母親の増加がすでに注目されていると言われている。(1990)²⁵ しかしこれらを調査するに当たっては、質問紙法では母親の本音、無意識の部分は出てこないと筆者は懸念している。多くの面接調査を繰り返し、丁寧に聞き取っていくことが大切であろう。

「母性」という言葉ひとつをとっても、それをどう受け止めているかで周囲の母親に対する態度も異なったものになってくる。これらの微妙な関係が、母親の育児姿勢と子どもの育ちに影響を与えていることを明確にすることが先決である。

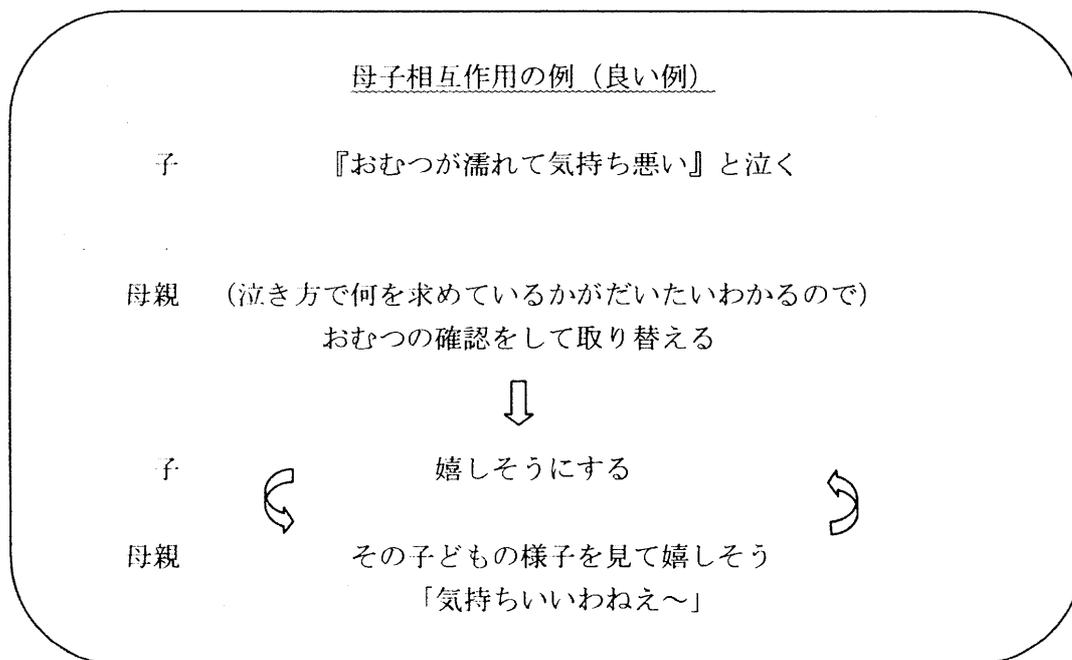


図1 母子相互作用（良い例）

↓

こうしてエリクソンのいう「信頼関係」が築かれていく

この図1は一例であるが、こういったことが様々な場面で幾度も繰り返されるうちに、母親と子どもの間に揺るぎのない信頼関係が形成されていく。ここで母親に不信感を抱いてしまうと、その後の成長過程の中でも他人との間に信頼関係を形成することが難しくなると言われている。

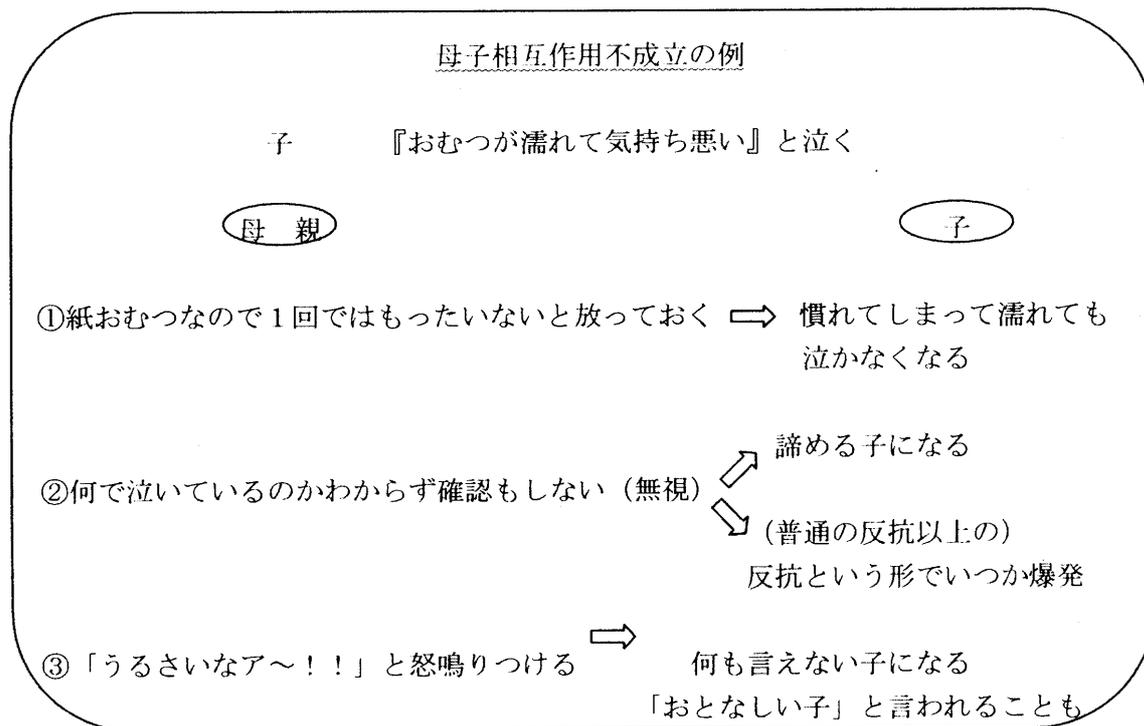


図2 母子相互作用（悪い例）

これらは感受性や応答性の低い母親である。①②③のようなことが悪循環で繰り返されるうちに、本音を出せない、何が自分の本音なのか分からない子どもに育っていく。

エピソード5：母子相互作用がなされないまま育った子ども

小学生の時、万引きをして警察に捕まった。しかし母親は「忙しいから」と迎えにも来ず、父親が迎えに来た。叱られるかと思ったらそのことについて両親は何も言わなかった。ただ黙って帰ってきたただけであった。ところがそれから数年したある日、たまたま機嫌の悪かった父親から「この万引き野郎！」と怒鳴られた。母親は「そのことは言ってはいけない。」と言い、この家では万引きの話はタブーになっている。子ども曰く、「いつもいつもやり過ぎられる。何をしても叱ってくれるわけでもない。」ただ親の機嫌が悪いときにのみ叱られるのである。

今から約20年前のTVドラマ（1時間半もの）で、心理療法を扱ったものがある。原作は『緑の葉が繁った』というものであるが、家庭内暴力の高校生男子とその両親（特に母親）を対象とした内容で、20年も経っているのに現代でもそのまま使えるのである。このドラマを視聴するたびに、心というものは時代が変わってもその大切なものは変わらないものだど痛感させられる。ではいったい何が変わったのであろうか。やはり親の育児姿勢、親としての態度である。

現代は情報過多の世の中で、いやでも親は様々な情報を受けてしまう。ミルクは何時間おきがいい、〇〇すれば頭のいい子に育つ、トイレット・トレーニングの時期、睡眠時間……等、挙げればきりがな。そんな中でこれは「子どもの個性」だから、と考えるよりも先に、余所の子と比較してしまい、いい意味でのマイペースな子育てができにくい時代でもある。あるいは親自身も他の親と比較し、間違っ

子どもの育ちと母親の育児姿勢（1）

た情報により振り回され、間違っただ方に同化していくこともある。ある父親が、子育てのことで悩んでいた友達にこうアドバイスをした。「今は子育ては親の判断だけではやっていけない時代だ。専門家に相談することが大事だよ。」

エピソード6：胎教を積極的に取り入れた母親とその子ども

この子どもは、胎児の時に音楽を聴かされていた。生後非常におとなしく、ぐずった時には胎児の時にかけていた音楽をかけると泣きやむ。初めは胎教の影響だと喜んでいた母親も、数ヶ月もするとサイレントベビーではないかと不安になってきた。しかし1歳にもなると、これまでおとなしかったのはどこへやら大変活発な女の子で男の子のような動きをする子になっていた。

これは長子の例であるが、やはりそこには母子相互作用が働いたと思われる。心配した母親が積極的な関与をするようになり、子どもに働きかけることで子どもも動き出す。そのことで安心した母親の喜ぶ顔を見てまた子どもも活発に動き出す。活発に動いてもいいのだと安心して。もしもその母親が「手の掛からない子ども」だと思い、赤ちゃんに構いもせず放っておいたらこの子どもの育ちはまた違ったものになっていたということは容易に推測されるだろう。

新生児期には母親は子どもを抱く、ミルクを与える、おむつを替える……などということによって養育する。すると子どもは気持ちよさそうな表情を見せる。そのことがまた母親の養育態度を一層強めていく。こういった母子相互作用が繰り返される中で母子関係が深まっていくのである。

しかし子育てはそんなに簡単なものではない。人にはわからないプレッシャーが襲いかかる。今まで自由だった時のようにはすべてが運ばない。わかってはいても、子どもと密室にいることで世間から隔離されたような疎外感、見捨てられ感を味わうことになる。またこうした気持ちの問題とは別に、現実問題として夜まとまった睡眠が取れない、過労がたまる……等々の問題を抱えることにもなる。これが子育ての実態である。

誰かに相談すれば「私は子どもが昼寝をしている時に一緒に寝ている」「積極的に外に出ていけばいい。今はサークルがたくさんあるのだから。」と言われる。子育てに立ち往生している母親がそんな正論を聞きたいのではない。そういう回答は、悩む母親にとっては一番辛いものであると同時に相談意欲をなくしてしまう。このことについての調査はまだ行っていないが、犯罪被害者や災害被害者に「何が一番助かったか」と調査したとき、「何度も何度も同じ話を黙って聴いてもらえたとき」という回答が一番多かったそうである。カウンセリングでも、クライアントは何度も何度も同じ話をしながら立ち直っていく課程がある。それと同じ事である。

更にこの母親にもうひとり子どもがいる場合はもっと大変である。そんなときも世間では簡単に「母親なのだからしっかり」することが求められる。近頃では「公園デビュー」なる言葉もあるように、そうでなくともコミュニケーションの苦手な若い母親が（年を取っていても苦手な人もいるが）、知らない人の中に入っていくのは大変なことなのである。

これは「母親には母性があるから……」で片付けられる問題ではない。

3. 社会の変遷

育休を取った父親から聞いた話であるが、夕方玄関の戸が開くと（妻が帰ってくると）飛んでいってあれこれ話したそうである。この父親は「主婦がおしゃべりだというけれど、一日誰とも喋らず家にいたらそりゃあ喋りたくなくて当然ですよ。」と話していた。育児というのは自分から進んで外に出向いていかない限り、本当に孤独なものである。近所づきあいも減ってきた今、まともに大人と話をしていない母親が日本全国にいったいどれだけいるのであろうか。

エピソード7：育休中で家の中にいると息が詰まりそうだという母親

「生後数ヶ月の子どもが、おとなしくよく寝ている。そのためどうしても家から出る機会を逃してしまう。たまに友達の家の子連れで遊びに行っても遊びに来てもらっても、友達の子どもの方が活発なのでそれに押されてしまっとうまく遊べない。親子共に尻込みしてしまう。また、外へいくにしてもどこに行けば子どもたちがいるのかわからない。」と深刻に涙を浮かべながら語っていた若い母親に、その心の重さを感じさせられた。

このことをしかるべき所に相談にすると、「〇〇に行けばいい」といとも簡単に言われる。しかしそこに思い切って行ってみても、その母親はそこで違和感を抱くことになる。つまりそこは積極的な人々の集まりの場であることが多いからである。そういった場を形成（主催）する人々はおもって母親の気持ちを学ぶべきであろう。あるいはカウンセリングマインド的なことを学ぶべきである。なぜならそういう場をつまづいてしまうと、この母親はもう二度とそういう場に出られなくなってしまうからである。それほど微妙な問題であるし、元気のある人に言わせれば「些細なこと」なのである。その「些細なこと」が母と子の問題を大きなものにしていく。見えないところで虐待に発展することも当然あり得る。

また最近の傾向として、親の生活スタイルに子どもを合わそうとする傾向が強まっている。例えば就寝時間のばらつき。これは親の生活スタイルに合わせているためで、原田の調査（2007）によると午後11時台に寝る子が13.1%になり、20年前の調査の6.2%から倍増したと言う。更に興味深いのは、「起床時間と就寝時間が不明」とした母親が20年前は1%にしか満たなかったのに、今回は1割弱もいたということである。つまり、それだけ母親が子どもの起床や就寝を意識していないことになる。

一方、子育てサークルへの参加は3歳児母親の4人に1人が参加している。しかし、その目的が変わってきたと原田は言う。以前は、子どもの遊び仲間作りがメインであったのが、現代では母親が自分たちの仲間作りに来ている。そのくせ、一見仲良くしているようでも本音には発展しないと言うのが現状のようである。内面での孤立である。^{#6}そしてそこで遊んでいる子どもたちも、母親の都合で遊びを切り上げられたりあちこちに連れ回されたりする。これでは「親子関係」というよりも友達関係である。しかし友達ならば対等のはずであるが、年の違う親子ではどうしても母親中心の「上下関係のある友達関係」というような変な構図になってしまう。

激しく移り変わっていく世の中で育った母親が、それなりに抱える悩みも大きい。現代の社会の中で

子どもの育ちと母親の育児姿勢（1）

真剣に悩む母親と、刹那主義で生きている母親。その差がどんどん開き、母親たちを二分化どころか細分化させていく傾向があるようで、そこで子どもたちがどう育っていくのかが危惧される。

4. 今後の課題

「母と子の生活実態」その奥深くに目を向けた研究は意外に少ないようである。おそらくそれは数字だけの調査では実態を把握しきれないからだと思う。面接調査も加え、実態を問う質問内容も吟味する必要がある。また、誰がどんな態度で行うかでもそこに現れてくる結果は異なってくると思われる。それ程微妙な問題である。微妙な問題を調査するには、調査する側がカウンセリングマインドを持って行うことが必要である。

子どもにとって、母親に本音で話すことができればどんなに楽か。しかし、何が本音で本当はどうしてほしいのか、その渦中にいるとわからないものである。それが大多数の親子である。母子共に二者関係の中だけでは本音を言えず（本音がわからなくなっており）、カウンセラーのような中立的第三者を交えたとき、自分の本音に初めて気づきだす。

母親の子どもに対する愛情が母親の自己犠牲の上に成り立っているとき、子どもは決して本当の幸福感を感じることはない。どこかで後ろ髪を引かれるような思いを抱いている。母親が生き生きと母親の役割を果たしながらも人生を楽しんで生きているとき、子どもは伸びやかに育っていく。筆者はそういう子どもたちのカウンセリングに何件もあたってきた。しかしこれは質問紙法で質問しても引っかかってこないケースであった。それほど、「母と子の生活実態」の内面は微妙なものである。面接調査でないと問題が浮上してこないことが多い。あまりにも日常のことすぎて意識されていないからである。ここにこういった問題に関しての統計的手法の難しさを感じる。科学的ではない手法も心の問題においては必要である。

時にはミュンヒハウゼン症候群のようなことが起こることもある。しかしこれも母親の辛さ、子育て中の心の中を吐き出すことができれば改善されるであろう。そういった場がないと、母親としての本当の役割を果たす前に、「母親」という役割を演じ、周囲から「いい母親」だと思われることで自分を守ろうとするようになる。そこに子どもの私物化、一心同体化が始まっていく。こうなると、子どもに向いていたはずの愛情は自分に対しての愛情へと変わり出す。

次回までに乳幼児を持つできるだけ多くの母親に面接を行い、母親自身も気づいていないような実態を把握していきたい。そしてカウンセリングの中で感じていること、今回ここで論じたことを明確に検証していきたい。声にならない声を拾い上げる。それも私たち臨床心理士の使命であると思っている。

註

- 1 Barbara Katz Rothman(1989)RECREATING MOTHERHOOD. New York
広瀬洋子 (訳) (1996)『母性をつくりなおす』勁草書房 序論 P. 5
- 2 成田善弘・根本真弓 (訳) (1993)『赤ん坊と母親』(ウィニコット著作集1)岩崎学術出版社 2-1 P. 29、
2-2 P. 35-36
- 3 作田 勉 (監訳) (2002)『ボウルビー母子関係入門』星和書店 P. 185
- 4 繁多 進・大日向雅美 (編) (1988)『母性こころ・からだ・社会』新曜社 P. 100
- 5 小林利宣 (編) (1990)『心理学中辞典』北大路書房 P. 2
- 6 毎日新聞 (2007. 1. 26)『止まらない少子化 — 変わる子育て —』より

参考文献

- 青木やよひ (1986)『母性とは何か』金子書房
- 秋山さと子 (1990)『母と子の深層』青土社
- 蘭 (あららぎ) 香代子 (1989)『母親モラトリアムの時代』北大路書房
- 井上輝子・上野千鶴子・江原由美子・天野正子 (1995)『母性』(日本のフェミニズム5) 岩波書店
- 井原成男・斉藤和恵 (訳) (1995)『両親に語る』(ウィニコット著作5) 岩崎学術出版社
- 大日向雅美 (1988)『母性の研究』川島書房
- 大日向雅美 (2001)『母性愛神話の畏』日本評論社
- 大日向雅美・古澤頼雄・小嶋秀夫・佐々木保行・都留民子 (1991)『母性の心理・社会学』医学書院
- 河合隼雄 (1997)『母性社会日本の病理』講談社+α文庫
- 木村 栄・馬場謙一 (1988)『母子癒着』(いま家族を問う3) 有斐閣
- 黒田実郎・黒田聖一 (訳) (1996)『ボウルビーとアタッチメント理論』J・ホームズ著 岩崎学術出版社
- グループ「母性」解説講座 (編) (1991)『「母性」を解説する』有斐閣選書
- 小嶋秀夫・大日向雅美 (編) (1990)『特別企画 — 母性』(こころの科学30) 日本評論社
- 佐々木保行 (編) (1988)『乳幼児心理学』
- 富田久枝・杉原一昭 (編) (2007)『保育カウンセリングへの招待』北大路書房
- 橋本景子他 (2005)『保育ソーシャルカウンセリング』建帛社
- 橋本景子 (2007)『親子関係の不協和とその影響 — 子どもと親の意識調査から —』
高田短期大学育児文化研究紀要 第2号
- 原田正文 (1994)『育児不安を超えて』朱鷺書房
- 根ヶ山光一 (2001)『母性と父性の人間科学』(ヒューマンサイエンスシリーズ4) コロナ社
- 松村恵子 (2005)『母性意識を考える』文芸社
- 吉川 悟・村上雅彦・東 豊 (編) (2002)『家族はこんなふうになる — 新日本家族十景』
(シリーズこころの健康を考える) 昭和堂
- 児童心理 (2006. 11) NO. 850『自分勝手な親への関わり』